

て考察しうると考えられる。

上記をふまえ、本論において、20世紀のアメリカを代表する作曲家コープランドの内実を、あらためて多面的な側面から探り、その知見を深めて蓄積を作っていくことには、音楽研究上の文脈のみにとどまらず、広くアメリカに対する文化戦略に資する意味においても、すくなくならず意義が見いださうものとする。現代のわれわれにとって必要なのは、明治以来のヨーロッパ芸術に対する優先的まなざしのなかで社会的に構築されてきた美的判断の中心的装置、いわば、その自明なる〈範疇〉‘category’というべき認識の枠組みをいちど相対化しつつ<sup>76</sup>、虚心坦懐に——もし、それが不可能とならば、すくなくとも、アメリカの言語を中心におくことで——20世紀アメリカの文化を、その周辺を含めて見つめることではないだろうか。他方でまた、文化芸術的側面のみならず、21世紀の、まさに今現在の国際情勢の全体を俯瞰する省察を経由して、あらためて、かの国との歴史的宿命的関係の重要性が確認される時、われわれの、20世紀アメリカ音楽文化研究の地平の見とおしが良くなるはずである。

## 0-6. コープランド研究の事例数、状況

本論の考察目的との関連での先行研究の内容的な検討は第2章にまとめた。したがって、ここではそれとは違う側面から、国内外の音楽研究においてコープランドが取り上げられる頻度について簡潔にまとめておきたい。

アメリカにおいて、研究対象としてコープランドが取り上げられた事例は、きわだって多いとはいえないが、しかし、今日もなお比較的関心をもって探究されている主題といえる。たとえば学位論文に限っても、2000年から2015年までに全米で提出された修士や博士論文のうち、コープランドの関するものは少なくとも40本程度が存在し、近年の博士論文では2013年に2本、2014年に3本が少なくとも提出されているとおり、毎年、一定程度での研究が恒常的に進められている<sup>77</sup>。

一方国内では、現在までに発表されたコーブランドに関する学術論文は 2008 年に東京芸術大学に提出された佐竹由美氏の博士論文を除けばほぼ皆無であり、わが国において彼の正当な評価がなされてきたとはいえない<sup>78</sup>。また『音楽芸術』誌のような専門雑誌でも、現在までにコーブランドが単独での特集が組まれたことはない。そもそも『音楽芸術』誌(1949年7月号)での、『アパラチアの春』の国内初演に関する記事、すなわちコーブランドに関連する初めての記事掲載から今日に至るまで、彼単独の作曲家紹介のほか、演奏会評やアメリカ音楽の記事内で一部触れられたものを含めても、その掲載記事自体は10本を超えない<sup>79</sup>。さらに、その掲載時期のほとんどが1950年代から60年代であり、その後、70年代から90年代には存在せず、今世紀へとまたぐ時期において、広くアメリカ音楽にふれた記事の一部で見つかる程度である。したがって、この状況を勘案するならば、この「最もアメリカ的な作曲家」<sup>80</sup>とも名辞される作曲家については、しかし、その日本での比較的高い知名度とは裏腹に、彼の内実はむしろ、今日でも未知領域とさえ言わねばならぬ状況であろう。

## 0-7. 主要な語の定義

### 0-7-1 「現代アメリカ」

主要な語の定義を確認しておきたい。ここまで「現代アメリカ」や、「保守」と「革新」の語を漠然と使用してきたが、ここで本論の使用におけるその定義をしておきたい。

最初に「現代アメリカ」の語であるが、ここで意味する使用例としては、まず本間長世らの1990年前後の研究書に現れる<sup>81</sup>。そこでの含意は「現代アメリカ」以前の「近代アメリカ」の存在と差異の強調である。その分節の意図は、当時、アメリカ史学研究が大局的歴史意識を欠く局所的な叙述に傾いていることに問題をみた本間らが、あらたに歴史的な脈において今日のアメリカを理解すべく、まずは「現代アメリカ」の発端を時間軸上でどこに置くかを探ったことに起因する。

本間は「20世紀が幕を開いた世紀転換期のアメリカを、現代アメリカの出現」と捉え<sup>82</sup>、この見解は日本の〈アメリカ学会〉[JAAS]で共有され継承されている。つまり有賀夏紀は「19世紀末から